



年中行事



川崎ゆきお

毎日毎日同じことを繰り返していると退屈になる。そこで昔の人は筋目筋目に行事をこしらえていたようだ。一番大きいのが正月だろうか。年中行事のトップバッターだが、その前に大晦日などもある。いずれも、退屈なので、そういう楽しみをこしらえていたのだろうか。儀式が先か、楽しみが先なのかは分からない。ただ、いつもとは違うお節料理、重箱に入ったものを食べる。食べることが最大の楽しみかもしれないが、年中いい珍しいものを食べて暮らすわけにはいかない。それだけのお金もないし、用意も大変だ。

当然村祭りなどは最大のイベントだろう。それらは季節とも関係してくる。節分だ。折々の節目で何らかの行事をする。それが年に何回かあり、それを楽しみに、普段の地味な暮らしを過ごすのだろう。ずっと地味なわけではなく、そうした日がたまにあるし、その日も決まっている。当然大きな祭りなら、終わった翌日から、もう準備をしていることもある。

日々、同じことの繰り返しの中で、そうではない日が訪れる。これがいいのだろう。町の祭り、村の祭り、家の祭り。

「年中行事ですか」

「そうです。もう少なくなりましたし、それほど楽しみにはしていませんがね。そこです」

「何ですか」

「自分で年中行事を作るわけです。もう昔のよう名村の共同体もなくなりましたからねえ」

「私はスポーツセンターへ通っているのですが、そこでいろいろと行事がありますよ。室内の施設ですが、ハイキングに出たりします。花見や紅葉狩りもね」

「ああ、そういうところも村のようなものなのですか」

「そうです。その代用のようなものです。会社へ行っていた頃は、いろいろ行事がありましたよ。当然盆踊り大会も花火大会も、温泉旅行もカラオケ大会もね」

「ああなるほど、しかし私は一人が好きでしてねえ。あまり団体戦が好きじゃない。そういう団体に加わるのが嫌なんです」

「ああ、そんな人がいるんだ。よくそれで生きてきましたねえ」

「いやいや、だから、いやいやながら参加していましたよ」

「そうでしょうか」

「そこです」

「何ですか」

「自分で年中行事を作り出したのは」

「ほう、どんな」

「夏はカブトムシ狩りです」

「まあ、昆虫採集のようなものですか」

「冬は耐寒ハイキングで、霊場巡り。これは、近く野山に霊場跡がありましてねえ。結構いろいろなものが残っているのですよ。これは夏場がいいのですが、あえて冬場に行きます」

「ほう。要するにただ単に楽しみを作るだけのことでしょ」

「それじゃ遊んでいるように見える。道楽をしているような。趣味に走っているように見えてしまう」

「実際、そうじゃないですか」

「それじゃお天道様に申し訳ない。やはり、昔からある年中行事のように、意味付けが必要なんです。そうでないと安心して遊べないじゃないですか」

「いや、だって、そもそも遊びなんですから、それでいいんじゃないですか」

「そんなことでお金を使うのは、罪悪感があるのです。無駄遣いですからねえ。しかし行事のために使うお金ならいいんです」

「それで、カブト虫狩りですか」

「はい」

「それはどんな行事なのですか」

「これは虫祭りと言って、まあ、悪い虫が付かないように願う行事です。また、流行病にかからないための行事です。儀式です」

「なるほど、名分を持ってきましたねえ」

「そうです。それらは安心して遊べます」

「他に何かありますか」

「秋には出た瞬間松茸を買って食べます」

「ほう」

「これは春のイチゴ祭りと、秋の松茸祭りはペアなんです。自分で決めました」

「高いでしょ、松茸は」

「松茸は魔羅です。これは魔除けです。あの形が魔除けなのです。それを食べないと、冬は越せません」

「言いたい放題ですよ。それじゃ」

「行事です。年中行事です。自分で作りました」

「はいはい」

了